



**最も美しく、住みやすいパース  
(西オーストラリア)**  
—野生の花の咲き乱れる季節に旅して—

札幌市医師会 門脇 純一

西オーストラリアの野生の花の開花の季節は、南半球に位置しているだけに、7月から10月中旬くらいと、言われている。もちろん開花は北側から始まり、南側に移り変わっていく。

西オーストラリアの面積は、大陸全体の1/3を占めているが、日本の7倍というから、その大きさは推して知るべしである。

ただ人口となると、2001年の調査によると、州全土で1,906,114人、パース都市圏人口は、1,400,507人となり、人は少なく、羊は最近、3,000万頭というから、羊のなかに人がポツン、ポツンと見かけるといふ格好になる。

気候は地中海性、温暖で、日中のエメラルドグリーン、夕映えのインド洋は一見の価値がある。パースのキングスパークから見る街は、それは昼は昼なりに、夜は違った景観をかもしだして、美しく、妖しく、人を迎えてくれることは必至である。

この街に居住する日本人は学生を含め6,000人と聞いた。中心街でもそれらしい顔つきの人にはよく出会った。街は美しい形容に、住み易いがついている。一般的家庭の一軒坪数は、150~200坪というから、平屋で十分、2・3階にする必要はない。

部屋を借りても、大きい上、ベッド数も多

いから、数人で共同生活ができ、水道・電気料金は安いから、生活費は低い。しかも、治安は一級品で、表向き人種差別の少ない所と聞けば、上述の表現は納得してもよさそうである。

しかも、最近のオーストラリアドルは強く、衣料も食物も安価であるから、基本の衣・食・住は万全といたい。市街を走るバス；Cat(Central Area Transit)は中心街を3方向に分かれて5~10分間隔で運行され、足の便もよく、無料である。

オーストラリア人の平均年収は、280~290万円相当と聞いたが、50~55歳で退職し、ゆったり、楽しく人生をエンジョイするのだという。

西オーストラリアの野生の花は確かに、その種類は多く1,200種と聞く。パース市のキングスパーク内でも、250種が咲き誇っている。

この花群の開花は、北から南へ移動する。ちょうど、日本の季節の紅葉の動きと同じである。車窓から花の集落をみていると、その分布の広さに感嘆する。オーストラリアの緑、植物は主に国の東、西に偏在し、残った中央部の大部分は砂漠が占めている。

ここの野生の花は、眼に入ってきたほとんどが、自慢にならないが、名前を知らない。しかし、色、形の美しさは、容赦なく眼に飛び込んでくる。この美しさの表現はなんといっても、口より目に軍配があがる。それゆえ、何枚かの写真を添えさせてもらう。

ガイドさんから聞いた、よく見る幾つかの花の名をあげてみる。カウスリップオーキッド(Cows lip orchid)、バニラオーキッド(Vanilla orchid)、パイプリリー(Pipe lily)、スモークブッシュ(Smoke bush)、バンクシア(Banksia)、キャッツポー(Cats paw)、ブルーボーイ(Blue boy)、ブラックボーイ(Black boy)、ジェラルトンワックス(Geraldton wax)、ワトル、属名；あかしあ(Wattles)などで、地生ランは200種もあるそうだ。

車窓から見えた一面の紫色のカーペットは、ふと富良野のラベンダーを思わせたが、セレベーションジェーンという花だそうである。有毒なので、近辺の雑草は生えないという。

長距離のバスに乗っていて、幾つか驚いたり、感心したりすることがあった。500キロメートルも交通信号のない道路、十字路はロータリー路になってることが多いこと、カ

カンガルーの事故を防止するためのカンガルーバー装着車がみられることなど、があった。カンガルーは夜に光に向かってくる性質があるからである。

車を降りてある休息所に立ち寄った時、大きな看板にBe Alertとかかかれているのを、見つけた。地元の運転手さんに、その意味を尋ねてみたところ、注意して運転するように、との答えが返ってきた。この横文字、病院で聞いたことがあると思いながら、帰ってきてNelsonの教科書を探してみると、neonatal alertnessというのを見出した。

それによると、新生児の出生後30～60分の覚醒とあり、オーストラリアの上記のalertは眠気を覚まして、しっかり運転しましょうに近いのでは、と勝手に解釈している。

オーストラリアの山火事は有名だが、残存している植物は、山火事に強いものだそうである。野生の花は、山火事の後に勢力を増す。

山火事は自然発生が多い。落雷、人のタバコなどが原因となる。原住民・アボリジニによる伝統的なブッシュファイアーは人工的である。そして、油分の多いユーカリなどの植物が火の勢いを増強することに影響している。

この国の有名な動物として、コアラ、カンガルーが並べあげられる。カンガルーはかつて5,000～6,000万頭もいたそうであるが、芝

を食べ荒らすことから、ハンターによって殺され間引きされて、現在は5万頭に減少してしまったそうである。一方、コアラのほうは、もともと少ないことから、保護動物として可愛がられて、対照的存在となっている。

コアラの好きなユーカリの種類は極めて多いそうだが、このうちコアラが食べるのは、ほんの数種と言われる。コアラは兎、象のように、食糞もするそうである。

トウンテイエイトと呼ばれる鳥の鳴き声を耳にし、グレイカンガルーといっしょにプレイできるゴルフ料金は1,000～2,000円というからゴルファーにとっては、天国と言えそうである。

パースには、南極行きの白瀬が出発する場所がある。近くにあるフリーマントルは船舶の寄港する単なる港だけではなく、歴史のあるオシャレな街でもある。パースから車で30分でいける距離にある。カプチーノ通りで飲んだカプチーノは美味しくて忘れられないものとなった。

このフリーマントルの街では、有名なエスプラネードホテルに宿をとることになった。翌朝5:30、ピィ、ピィという、小鳥のナチュラルコール、安価ながら豪華な目覚ましとなり、何とも言えない清涼感も覚えた。



## Sporty Car

石狩医師会 御園生 潤

昭和62年5月、私は母校の第一病理学教室の大学院生として、多忙な日々を送っていた。こうした生活の足として大活躍してくれていたものの一つが、ようやく貯金をはたいて購入したモデルチェンジ直前の愛車のAE86レビンGT V（後輪駆動の最終型で絶大な人気があったものの、間もなく前輪駆動車のAE92に移行しようとしていた）であった。パワーステアリング、パワーウィンドウ、オーディオ類も一切標準装備から外されていたこの「走り」に徹した車は月間3,000kmのペースで私の生活を支えてくれていたが、当時、この車の購入のために支払った対価は130万円ほどであったように思う。私の財力の限界ぎりぎりの線でのクルマ購入であった。この車を車検切れで手放してから何台かの同種のスポーティーカーを乗りついで今日に至っている私ではあるが、その間一貫して貫いているポリシーがある。すなわち、2ドアクーペ、FR（後輪駆動）、MT（マニュアル、トランスミッション）という車好きなら誰でも容認、理解してくれる条件のものを乗り継いでいる。

○

「スポーツカーに乗ろうと思う」。多くの若者の心理を描写した表現であるが、実用上の制約、職場への出勤時の同僚の視線など、どうしても、ある年齢を越え、家族を有するようになると、車を手放したり、諦観せざるを得ないユーザーが多く、セカンド・カーとして、いわゆる「休日・週末・遊びのクルマ」としてスポーティーカーを所有できる人は、極少数であり、大方の人たちは、大衆車などへと選択の方向・幅を指向・転換し、同化されてゆく。

○

海外では、スポーツカーの類のクルマを多数見かける。乗り方もイキだ。多少の雨であったら幌もかけず、平気で走り回っている。街には渋滞もある。道幅も狭い。信号も少な

く、走りやすいという点を除いては、日本とさほど変わらない。では、なぜ「クルマ大国」と呼ばれた日本で、この点だけが欠落してしまったのだろうか？

ビジネスに上手に使いこなす大人が少なすぎるのではないだろうか。衆人環視を気にし過ぎる民族性かもしれない。もちろん、上司や世間の目を気にして、考慮しなければ、自分のクルマを選べない職業の人も多い。医師、大学教授、アーティスト、個人事業主、彼等がリードすれば良いと思う。そうすると、日本の道路の風景はもっと楽しいものになるのではないか。

スポーティーカーで出勤するというのは、ともすると、職場に向かう姿勢としてはネガティブ（消極的）なイメージとしてとらえられがちであるが、見方を変えれば、仕事にスポーティーカーを使用することにより、ともすると特異と思われがちなクルマを選択することにより自分は社会・仕事に対してアグレッシブに生きていることを無言のうちに自己表現・主張していることになるのではないか。

仕事の間というものは、各人がそれぞれの立場で自己主張し、それらが、少なからず、まれならず衝突・拮抗して、職場での「時間」が流れてゆく。職場では「ストレス」が鬱積して蓄積されている。それは、見方を変えるならば、人間が内なるパワーを社会に向けて解き放つ場でもあろう。スポーティーカーは常にドライバーに挑戦し、それに刺激を与え続ける。仕事でこうした車種を使うということは、移動の間中、それらの刺激を常に全身で体感しているということだ。心地良い緊張感と肉体的刺激が常にドライバーと共にある。積極的に仕事に対して取り組もうとするドライバーの姿勢が反映されているともいえるのではないか。

○

現在の私の愛車は、ニッサンRPS13（180SX）。ダークパープルの塗装色とチルトアップのサンルーフ装備車で7年落ちのワンオーナーのセカンドハンドの買物であった（当該車種はすでに生産中止）が程度も良く自分としても、2代目の180SXであり、至極満足している。オープンカーでのドライビングが似合う北海道の夏。サンルーフ車の魅力



である陽光を手中にしての「開放感」を味わいつつ、この夏も、多くの本州ナンバーの車に混じって一寸贅沢なカーライフをエンジョイした。季節はこれから冬に向かうが、冬期でも晴天の日に、足元に暖房を入れ、サンルーフを開け、いわば「頭寒足熱」の環境でのドライビングをこなしている姿も周囲から見て、北国ならではの粋な光景である。そして、今回も出勤する私と、夜勤明けの、自分の息子ほどの年齢の看護職員の運転するスポーティーカーが、勤務先の近くの路上で、お互いにバッシングライトでサインを送り、「御苦勞様、気をつけて」と無言の交換をして、すれ違うシーンがくり返されている。

付) 180 S Xは昭和63年に華々しくデビューしたS13シルビアの兄弟車。リトラクタブル

ヘッドライトとハッチバックが特徴で、シルビアに遅れること1年後の平成元年にデビューした。180 S Xの名前の由来はデビュー当初の両車が1,800ccの排気量(のちに2,000ccになる)であったことから。



## お知らせ

### 北海道医報新年号「新春随想」について(原稿募集)

◇情報広報部◇

北海道医師会では、例年、新年の年男・年女に当たられる会員に「新春随想」をご執筆いただき、1月1日付発行の本誌に掲載いたしております。

つきましては、**猪年生まれ会員**で、ご執筆いただける方は下記の要領をご留意の上、是非ご投稿くださいますようお願い申し上げます。

記

1. 題 目 「新春随想」  
\* 必ず副題をお付けください。  
\* 写真・カット等がございましたら、併せてお寄せください。
2. 締 切 11月24日(金)
3. 文 字 数 1,600字以内
4. 送 付 先 E-mail: ihou@m.douj.jp (写真・カット添付可)  
F a x : 011 - 252 - 3233